

### Ⅲ 放送に至る経緯と番組内容

#### 1. 不二家問題の発生

2007年1月9日（火）、食品製造販売を業とする不二家の埼玉工場において、消費期限切れ原材料を使用した製品が製造・販売されていたことが発覚し、以後数週間におわたって大きく報道される事態となった。これを機に同社工場が各地保健所の立ち入り検査を受けるとともに、厚労省や農水省からも説明を求められた。

番組①は問題発覚から約2週間後、不二家に関する一連の出来事が社会問題化し、消費者や視聴者の大きな関心を集めていたさなかに放送された。

#### 2. 1月22日（月）放送分（①）の取材から放送に至る経緯

『みのもんたの朝ズバッ！』はTBSテレビ制作局が制作し、月曜から金曜までの朝5時30分から8時30分まで放送されている情報番組である。番組の責任体制は、制作プロデューサーが全体を統轄し、その下に番組プロデューサーがおり、さらに曜日ごとに決められた曜日プロデューサーが担当曜日の制作現場を采配している。1月22日の放送日に当たる月曜日の班は、Xプロデューサーが統括しており、この月曜班には約20名のディレクター等のスタッフがいるが、その大半は制作会社に所属している。

1月19日（金）午後3時頃、かつて不二家平塚工場で働いていたという女性（以下、A通報者と呼ぶ）からTBSに電話があり、『朝ズバッ！』月曜班のYディレクター（制作会社所属）が対応した。

A通報者は「10年ほど前から数年間、平塚工場で働いていた」と言い、同工場では「賞味期限切れのチョコレートを溶かし、製造し直していた」等と語り、翌20日午前中の撮影取材に応じることを承諾した。

Xプロデューサーら番組制作幹部はYディレクターから報告を受け、A通報者の取材をするよう指示した。

1月20日（土）午前、Yディレクターはカメラマン、ビデオエンジニア、ロケ車ドライバーを伴ってA通報者と落ち合い、車中や公園で約1時間半、面談した。A通報者の撮影取材は公園内において、約14分間にわたって行なわれ、A通報者は「賞味期限切れチョコレートを溶かし、再利用していた」ことや、「売れ残ってもどってきた（クッキーの）カントリーマアムを包装し直して、再出荷していた」等を語った。その後、Yディレクターらは発言内容の再確認、A通報者が持参した勤務当時の写真2葉の撮影を行ない、またA通報者も記憶に基づいて工場の配置図を手書きするなどした。

このときYディレクターはA通報者に「（同様の事実を知っている）別の人を紹介してほしい」と依頼し、同番組スタッフルームの電話番号や自分の携帯電話の番号を伝えた。

なお、TBSないし同番組からA通報者への「取材謝礼」「出演料」「情報提供料」等金銭の支払いは、この取材の際もそれ以後も行なわれていない。

A通報者と別れたあと、Yディレクターらは不二家平塚工場に向かい、その外観等を撮影するとともに、A通報者が描いた工場配置図がおおむね正確であることを確認し、帰社した。

同日夕刻、Yディレクターは不二家広報に電話し、A通報者の発言概要を伝え、事実確認を求めた。その後、不二家広報からYディレクターに電話があり、「工場内で発生した成形不良品を溶かして作り直していることはあるが、返品を使うことはない」「平塚工場ではカントリーマアムを作っていない」等、A通報者の発言内容を否定する内容の回答があった。

Xプロデューサーら同番組制作幹部は、A通報者の発言と不二家の回答を検討し、A通報者の発言を補強する別の材料が必要と判断し、この段階では放送を保留することに決めると同時に、Yディレクターにさらに取材を進めるよう指示した。

同日夜、Yディレクターの携帯電話に、A通報者からその電話番号を聞いたという男性（B通報者と呼ぶ）が電話をかけてきた。B通報者は平塚工場において「パート（タイム雇用の）従業員のまとめ役のような仕事をしていた」と言い、A通報者の同工場勤務当時のニックネームを知っているなど、同工場の内情をよく知っている様子だった。B通報者は「賞味期限切れチョコレートを溶かし、バケツ状のものに入れて、再利用していたことは自分も知っている」「カントリーマアムの件はわからない」等、A通報者の発言の主要部分を裏づけることを語ったが、電話音声の録音や撮影取材については承諾しなかった。

この電話でのやりとりの後、Yディレクターは再度不二家に電話し、もう1人別の内部者がA通報者と同様の発言をしていることを伝え、確認を要請した。

1月21日（日）昼頃、Yディレクターは不二家広報に電話し、前夜の要請についての回答を求めたが、「まだ調査中であり、確認が取れていない」「放送するのであれば、『調査中』と言わずに、『確認が取れていない』と言ってほしい」旨の返答を得た（なお、任意に提出された「不二家信頼回復対策会議（郷原信郎議長）」の資料によれば、上記2件の電話に関する記録は存在しない、とされる。番組制作者によるB通報者の発言の取り扱い、およびこの前後の不二家広報とのやりとりに関する記録の不備については、後述する）。

以上の報告を受けたXプロデューサーら番組制作幹部は、

（1）A通報者の発言に体験者にしか語れないリアリティーがあり、その内容も一貫していて、ブレがない。

（2）B通報者が同様にチョコレート再使用について明言し、他方で、知らないことは知らないと言うなど不自然さが無い。

(3) 不二家側も成形不良品を作り直す工程があることを認めていることから、返品を溶かし、再利用することも可能だったはずである。

(4) また不二家は放送する場合には、「確認が取れていない」というコメントにしてほしい、と放送されることを認識して対応している。

等々を検討し、翌22日月曜日放送の『朝ズバッ!』の1コーナーとして放送することを決定した。

その後、上司の指示を受けたYディレクターは、A通報者の発言のVTR編集を行なう一方、番組が契約しているイラストレーターに連絡し、上司のチーフディレクターとともに発言の概略を説明し、チョコレート再利用工程の略図を示した上で、番組中に司会者みのもんたが使うフリップの作成を依頼した。

### 3. 1月22日(月)放送分(①)の番組内容

「新証言…不二家の“チョコ再利用”疑惑」と題した約4分半の放送は、前後段の2パートで構成されている。前段では、不二家平塚工場で働いていたというA通報者が、顔を映さない、また音声を加工したVTR素材によって登場し、

(1) 賞味期限切れチョコレートをパッケージし直し、再利用していた。

(2) 賞味期限切れで返品されてきたチョコレートを溶かし、製造し直して、新品として出荷していた。

等々の内部告発を行なった。この発言に対する不二家側の反応として、「確認が取れていない」とのコメントも紹介されている。

後段は、みのもんた司会者がこの(2)の発言内容をイラスト化した3枚のフリップ(表紙を含めると4枚)を示しながら、「賞味期限切れチョコを開封」「そのチョコに牛乳などを加えて混ぜる」「新製品として再出荷」などと解説し、「これはもう、何をかいわんや」「経営自体がちょっとおかしいんじゃないかと思います」等々と強い口調で語りながら、スタジオにいる3名のコメントーターに発言を求め、コメントーターらも「作る人間がこういうふう腐って変わってくると、まあひどいことになるんだなと思いますよ」などと、それぞれに不二家に対する不信を語り、このコーナーが終わる。

### 4. 不二家からの指摘と抗議

同日夜、不二家広報は番組に対し、「事実と異なった内容」である旨、以下のような指摘・抗議を行なうとともに、善処方を要請した。

(1) 賞味期限の切れたチョコレートは平塚工場にもどってくることはなく、工場とは別の場所にある物流倉庫にもどし、廃棄処分をしている。よって、再処理して商品化することはない。

(2) チョコレート包装紙には賞味期限の印字はあるが、(A通報者の言うような) 製造日の印字はしていない。

(3) 賞味期限切れチョコレートが工場に返品されることはない(ので、開封して再利用することはない)。

(4) チョコレート製造には(司会者がフリップで示したような) 牛乳を加える工程はない。

翌23日、同番組宛てに、不二家広報がこれら指摘と要請をあらためて文書化したファックスが届いた。

なお、番組①が放送されたのと同じ日、不二家は経営陣の交代を発表した。同社はその後、同社が設置した第三者委員会等による現状調査・業務改善策の提起を受け、再生への取り組みを本格的に始めるに至った。この間の一時期、1月末日以降およそ5週間にわたって、同社広報からの連絡は途絶した。

## 5. 4月18日(水)放送分(②)の放送に至る経緯

不二家広報から上述の指摘・抗議を受け、善処方を要請されたTBS同番組制作幹部と月曜班スタッフは、番組①の放送内容の正確性を再確認するため、以後、番組②の放送までの約3カ月間に、以下のような作業を行なった。なお、この作業には途中から同社コンプライアンス室、報道局が委嘱している顧問弁護士らも加わっている。

(1) A通報者に数回にわたって面談し、発言内容にブレのないことを確認した。A通報者の内部告発動機が「ただ知っていることを伝えなかった」ことにあり、不二家および同社平塚工場に対する怨恨感情などはなく、また発言提供に対する対価要求がないこともたしかめた。面談の際、A通報者が不二家平塚工場で働いていたことを示す製品包装材料、メモ書きに使用した作業工程用紙、耳栓などの物証を確認し、撮影した。

(2) 平塚工場近辺の住宅街を調査し、同工場の現在および過去の社員やパートタイム雇用の従業員を探し出し、A通報者の発言内容をクロスチェックするための準備を行なった。

(3) 不二家広報に対しては、「製品包装記載のロット番号について」「賞味期限切れ商品の回収方法について」「チョコレートの製造工程と混入する原材料について」等々、チョコレート製造と賞味期限切れチョコレートの取り扱いに関する問い合わせを口頭と文書で行なった。

両者の交渉は3月中旬に再開され、不二家側からは「小売店から返却された商品を使っていた事実はない」「平塚工場ではカントリーマアムを製造していない」旨の従来通りの返答のほか、「ロット番号と賞味期限表示は無関係」「(チョコレートの) 製法については、今回の件と直接的な関係がないと思われる為、お答えできません」等の回

答が寄せられたが、両者間の話し合いは相互不信のため暗礁に乗り上げ、実質的には進まなかった。

なお、B通報者については、1月22日の番組①の放送翌日に携帯電話による連絡が取れたものの、その後は留守番電話状態がつづき、数日後には不使用状態になってしまい、以後現在まで連絡が取れない状態がつづいている。

3月下旬、TBSおよび同番組関係者と不二家との折衝が膠着するなか、週刊誌、新聞等が『朝ズバッ！』の不二家報道に捏造の疑いがある旨、いっせいに報じた。これに関してTBSは4月13日、総務省に対して、番組①の放送に至った経緯などの説明を行なうとともに、同番組の「誤解を招きかねなかった表現」部分等について、訂正・お詫びの放送をするための準備に取りかかった。

## 6. 4月18日（水）放送分（②）の番組内容

「ミルクキーがもどってきた！ 不二家再生へ本格スタート」と題した約6分間のコーナーは、大別して4つのパートから構成されていた。

(1) 司会者みのもんたが「私も（不二家の）ペコちゃんポコちゃんには愛着があって、そういう気持ちの表われとして、大変厳しいことも言ったが、販売再開はうれしい」などと語る導入部分。

(2) 不二家の新社長がコンビニ店で同社製品を購入し、販売再開を喜ぶコメントを語ったり、一般消費者の同趣旨の発言を紹介する部分。

(3) スタジオのコメンテーターが、「モザイクや顔を出さない匿名証言」に頼ることの危険性など、テレビジャーナリズムのあり方を語り、それを引き取った司会者が「スタジオのお菓子は全部不二家にしますから」とつづける部分。

(4) 局アナウンサーと事前制作VTRによる1月22日（月）放送分の番組①についての「訂正」「お詫び」部分。スタジオのアナウンサーが「ここでお断わりです」と言い、VTRに切り替わって、「誤解を招きかねない表現」があったとして、次の3点に関して文字表示とナレーションによる訂正とお詫びを行なった。

(i) 『出荷されたチョコレートが工場にもどる』は証言者の伝聞であり、事実であるという確証を得たものではなかった。

(ii) 「証言者の不二家勤務は10年以上前」のことだったが、「最近のことと誤解されかねない」表現だった。

(iii) 『チョコレートと牛乳を混ぜ合わせた』という表現で、「牛乳と断定した点は正確性を欠いていた」。

こののち、画面は水面状の模様が変わり、「TBSは、法律家が証言者に面談するなどして調査した結果、やらせや捏造に類する疑いはないとの報告を受けている」旨のナレーションがつづく。さらに画面が変わって再びアナウンサーが登場し、「1月の一

連の不二家報道で、行き過ぎた表現やコメントがあったことも併せてお詫びします」と語り、このコーナーが終わる。

## 7. 不二家の経営判断と紛争の収束

この放送があった同日、不二家は今後の同社の「信頼回復」「経営革新」「安全衛生」に向けた取り組みを明らかにした「不二家の再生に向けて」という文書を発表した。このなかで同社は、同社が設置した「不二家信頼回復対策会議」が3月末に『朝ズバッ!』の一連の報道に対して「損害賠償も含めて」「厳正に対応すべき」と提言した件につき、「本日朝の放送で対応頂き」「その内容は、弊社の要求に応える謝罪である、との経営判断に基づき、これを受け入れることと致しました」と表明した。

これによって、およそ3カ月間に及んだ両者間の紛争は一応収束した。